The Japanese Teratology Society

成人集団については，転座保有者のみが観察され，その頻度は0.38％とやや高かった．成人群にみられるこれらの異常は先天的なものであり，原爆被曝と何ら関係はないことはいうまでもない．

この結果の比較検討から，マウスで証明されている放射線誘発性の転座個体の増加については，広島・長崎集団に関しては否定的な結果が得られた．しかし，このことは原爆放射線の影響がまったく存在しないことを意味する訳ではない．さらに大きな集団に対する調査を，染色体のみならず可能な限りの分野から，新しい技法を導入しつつ究明することの重要性を示唆するものである．

〔質問〕 **三上美樹**（三大・医・解剖）

現在でも，粉ミルクに放射能があり，Sr-90やCs-137などの放射性物質が含まれていると考えられるが，いわゆる内部照射によって染色体異常を誘発したという事例があったらお教え願いたい．

〔答〕 **阿波章夫**

内部照射による染色体異常についてはthorotrast（血管造影剤）に関する知見がある．それによると，安定型染色体異常が高頻度で残存すること，異常クローンが観察されるという．

---

4. 広島の胎内原爆被爆小頭症の現況*

平　井　　剛**

広島の胎内原爆被爆小頭症は，昭和40年末に田渕ほか（厚生省科学研究「小頭症の疫学的研究班」）により，44名の生存が確かめられた．

それらの小頭症の定義は，非被爆児の平均頭囲－2標準偏差以下とした．そのうち軽度小頭症（M-2σ＞～≧M-3σ）は32名（女子19名），高度小頭症（～＜M-3σ）は12名（女子7名）で，知能発育の遅延を伴うものは軽度小頭症に2名（女子1名）で高度小頭症は全例であった．

これらの44名の7年余後の現況は

1）存否：昭和48年6月20日現在，死亡は軽度小頭症の男子1名の自殺のみで，他は健在している．

2）婚姻：昭和48年6月20日現在，軽度小頭症では，男性12名中3名，女性19名中16名が，高度小頭症では，男性5名中1名，女性7名中1名がそれぞれ結婚している．軽度小頭症で知能発育の遅延を伴う2名は未婚である．

3）妊孕（分娩）：昭和48年5月10日現在，既婚女性17名（高度小頭症1名）の初回分娩までの結婚年数をみると，軽度小頭症16名中13名（結婚後10カ月未満2名と調査未了の1名を除く）が3年以内に分娩をしている．結婚1年目に9名が，2年目に3名が，3年目に1名がそれぞれ初産している．高度小頭症（1名）では結婚後2年間に2回の自然流産があり，分娩経験がない．

4）社会生活：昭和48年6月20日現在，軽度小頭症31名中知能発育遅延を伴った2名を除く29名は就業または家庭生活を正常に営んでいる．これら29名は2名のみが中卒で残りの全員は高卒以上の学歴を有している．一方，高度小頭症12名は昭和40年末に家庭で家族による保護生活を送っていたが，そのうち2名が入院中（てんかん発作，女性），3名が入所中（精薄施設）で，保護監督下での軽作業従事者は3名（男性）にすぎず，女性の既婚者1名も家族による保護下に近い実態である．すなわち最近7年間で本人の社会適応状態の劣化が半数近くにみられてきている．

5）家族環境：昭和48年6月20日現在，知能発育の遅延を伴う14名（高度小頭症の12名は全員）のうち，両親の死亡せるものは1名，片親のみのものは8名，両親のあるものは5名にすぎず，親の年令は片親のみのものは5名が60才以上で，両親のあるものも1名は両親とも71才以上であり高令化してきている．

以上のように，昭和48年6月現在における広島の胎内原爆被爆小頭症生存者43名のうち，知能正常な軽度

---

* The clinical and social views on microcephalic people exposed in Hiroshima

** G. HIRAI, Hiroshima
広島大学医学部産婦人科学教室

NII-Electronic Library Service

The Japanese Teratology Society

小頭症31名は，結婚を含む正常な社会生活を営んでいるが，高度小頭症12名および知能発育の遅延を伴う軽度小頭症2名の計14名には，社会適応能力のより低下の傾向がみられ，また親の老齢化による保護環境の悪化が懸念されてきた今日，大多数が読み書きができず，計算能力にいたっては全員にないといって良いこれらの14名に対して，一生の保護生活を送ることのできる公的施設の早急な設立が切望される．

NII-Electronic Library Service